

Title	シャフクノーフ氏紹介の沿海州出土の一鳥頭型石製鬮斧
Sub Title	An introduction to the "Bird-head" shaped stone striking tools excavated from the marine province, USSR as presented by E. V. Shavknov
Author	平井, 尚志(Hirai, Naoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1975
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.47, No.1/2 (1975. 12) ,p.133- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19751200-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャフクノーフ氏紹介の

沿海州出土の一鳥頭型石製鬩斧

平井尙志

古代北方ユーラシアの文物交流の顕著な考古学上の証左として動物文が取りあげられ、論じられてはや半世紀以上の歴史をもつに至った。

ここ三十年来シベリア、中央アジア、中国の考古学調査が進むにつれてこの問題はさらに多くの資料を提供し年代的にも型式学的にもより精密な論考が特にソ連邦の考古学者によって発表されている。

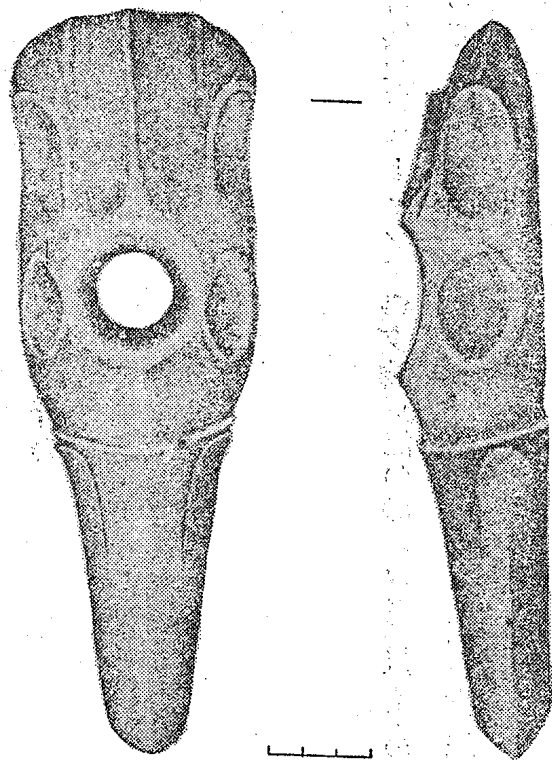
今から約四十年程前、江上波夫、駒井和愛、水野清一博士は共筆で関東州旅順（現中国東北地区旅大市）管内営城子会后海屯に属し、渤海湾に面した小半島上の双台子遺跡から出土したという鳥頭型石製鬩斧を欧亜大陸の古代文化交渉上の珍重すべき一遺物として紹介されたことがある。⁽¹⁾

昨年、ソ連邦科学アカデミーが季刊で出している「ソビエト考古学」一九七四年第三号に右の双台子出土石製鬩斧にはなはだよく似た沿海州南部出土と思われるやはり鳥頭型石製鬩斧をソ連邦極東考古学とこの方面の民族史に通じたエ・ヴェ・シャフクノーフ氏が紹介している。⁽²⁾

シャフクノーフ氏の文によるとこの鳥頭型石製鬩斧はソ連邦沿海州ウスリースク市（旧ウォロシーフ市）の市立博物館研究員エム・エス・セルゲイコ氏が一九七一年初め頃、中央学界に資料提供したものである。

長さは二三・三センチ、刃部の最大巾七・三センチ。図で判るように明らかに水鳥の頭部を模して作られた鶴嘴状の石器で上部には縦に五本の隆起線を浮彫りで作り出し、

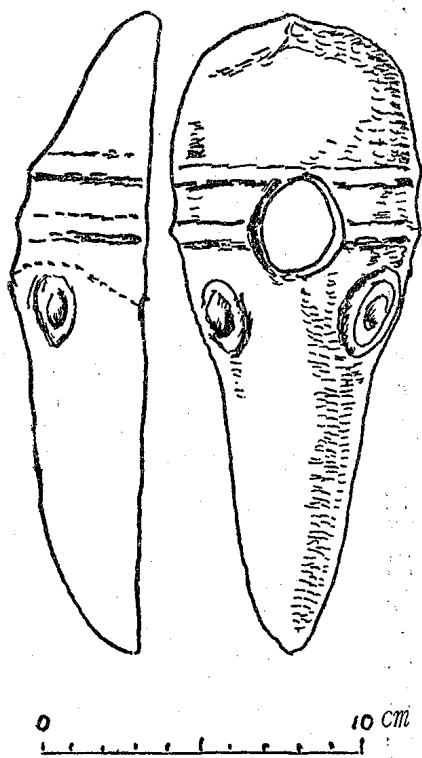
両側面に卵形の眼を彫りくぼめ、全長の約三分の一強が嘴となつてこの石器の刃部を形成している。両眼の中間に柄を通す為のものと思われる円い孔が穿たれている。石材の色は緑がかった灰色の石で磨いた際の条痕が認められ、頭部には暗褐色の塗料がなお残っていたらしい。シャフクノーフ氏は水禽「カイツブリ」の自然色を写したものと見てゐる(図1)。この石器は出土地、出土状況、伴出物については残念乍ら判然としていない。鉱物学を研究しているエス・アー・シチェキ氏の石質鑑定によると斑文を有する橄



第1図

欖石としており、この石は沿海州南部のハサン地区から産出するのでシャフクノーフ氏はこれを手掛りとしてウスリースク市、ハサン附近から出土したものと断定している。

一方江上、駒井、水野三氏による双台子の報文に掲載された鳥頭型鬮斧は当時大連市在住の吉田悌太郎氏が昭和五年同遺跡において購入したもので長さ約二〇センチ、頭部最大巾約四・五センチ、頭部には横に三条の隆起線を浮彫にし両眼の上方中央に口径約三センチの孔をうがっている。(長さ等の数値は報文に書かれていないので図から測定)。石質は黒色の軟い滑石(図2)。同時に購入したものに環状石斧、大型磨製蛤刃石斧、打製石鏃があった由を報



第2図

している。

この報文では遺跡で採集ならびに購入した石器、土器、石、土製垂飾品などは遼東半島に所在する積石塚に係る通有のものとしているが、この鳥頭型鬮斧については重要視し欧亜の北部にまたがって出土する櫛目文土器こそこの双台子では見付けられなかったが、当時発表されていたロシア、フィンランドの関連文献を引かれて北ユーラシアにおける動物文型鬮斧の流伝の延長とみると論述されている。

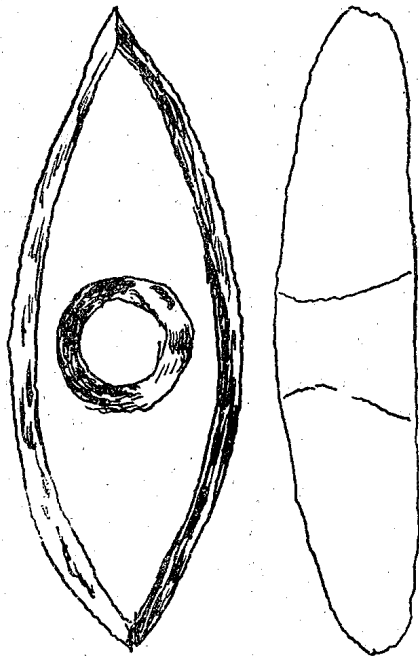
シャフクノーフ氏は氏紹介のこの鳥頭型石製鬮斧をアー・ペー・オクラドニコフの論文中に引かれた沿海州南部ズメイナヤ丘出土の多頭石斧、及び環状石斧と関係づけてヤンコフスキー貝塚等を遺したシデミ文化の所産とし、エヌ・エル・チェレノワ女史によるタガール文化についての著書を引用してスキート・タガール文化のザバイカル以東への伝播と見做し紀元前五、六世紀を遡らないと結んでいる。

特徴的なこれら遺物が西方からモンゴル高原をはさんで南北どの径路を通じてユーラシア大陸の東北端に達したか

沿海州出土の一鳥頭型石製鬮斧

はまだ不分明とはいえず、ふたつ乍らスキート・シベリア系文物の流れをくんだ遺物とすることに異論はない。興味のあることはそれぞれの出土地と思われる遼東半島旅大市地区と沿海州ポシエト湾岸とは直線距離にして一〇〇〇キロ以上離れているが、前者の地区に環状石斧や櫛目によると思われる雷文風の紋様をもった土器が僅かながら出土しており、⁽³⁾ 近くの大長山島上馬石貝塚からは約二〇センチ位の舟形石製鬮斧⁽⁴⁾、また細形銅剣を模した角剣が見出されている⁽⁴⁾。

沿海州南部につゞく北朝鮮東北部でも有孔の多頭石斧、環状石斧が潼関洞や豆満江下流岸から、⁽⁵⁾ 長さ約二〇センチ



第3図

と思われる舟形石製鬩斧が会寧近傍からそれぞれ発見されている。⁽⁶⁾ 雷文風紋様の土器は戦前に北朝鮮羅南の油坂貝塚から出土しており特色的な土器として報告された。⁽⁷⁾ 沿海州ではグラドスカヤ遺跡ほか数箇所から発見され、それぞれの報文に載せられている。

鳥頭型石製鬩斧がスキート・シベリア系文物に属することは間違いないがさりとて西方においてこれとほぼ同型の石製なり銅製の遺物については寡聞にして知らない。この鬩斧の源流と思われる西方の動物文のうち鳥類にはワシなどの猛禽類を象ったものが殆んどである。水禽を模したことは変形であり、地方化と見てよからう。ともに実用品でないことも共通している。

これら二つの鳥頭型石製鬩斧が出土した両地域ならびにその近くの出土遺物には相互に相通じたものが認められる。加えるに沿海州南部の小流マイヘ川の一遺跡イズウエストフ丘からは細形銅剣、多鈕細文鏡が石器などを伴って石棺墓様のなかから発見されたことがある。⁽⁸⁾ 両地域の同時代文化の相互関係、源流については今後大いに研究される

べき要素をもっていると考えられるので、右の特色的な遺物をそれぞれの報文に基いて紹介した次第である。

註

- (1) 江上波夫、駒井和愛、水野清一「旅順双台子山新石器時代遺跡」人類学雑誌、第四九卷第一号 昭和九年一月
- (2) Shavkunov, E. V., Kamennyj Chekan iz Juzhnogo Primor'ja. SA 3, 1974
- (3) 「羊頭窪」東方考古学叢刊第三冊 図版第五四 昭和十八年
- (4) 島田貞彦「関東州の古代文化」(雞冠壺)所収、康徳十一年 昭和十九年(新京特別市で刊行)。なおこの角剣は琵琶形銅剣を模したと見た方がよい。
- (5) 八木契三郎「朝鮮咸鏡北道石器考」昭和十三年 榎本亀次郎「北鮮の石器資料」考古学、第六卷第四号
- (6) 小池興吉編「北鮮太古石器」大正十二年。(会寧で刊行)
- (7) 横山将三郎「油坂貝塚に就て」(小田先生頌寿記念 朝鮮論集)所収 昭和九年
- (8) 拙稿「沿海州新出土の多鈕細文鏡とその一括遺物について」考古学雑誌、第四六卷第三号 挿図第二、三図は註記のものより再トレースした。